

京阪神東雲

鳥取県立鳥取東高等学校同窓会

東雲会京阪神支部会報●第14号

<http://okada.sub.jp/higashi/>

連絡先 岡田俊一(山脈12回)

神戸市垂水区神和台2-2-9

同窓会で鳥取弁を思い出す

豪華に平成22年度総会開催

22年度はリーガロイヤルで開催されました。素晴らしいホテルで食事を楽しむコースでした。当支部の総会が60回目という人間でいえば還暦となる節目の年でもありました。本部同窓会から八村輝夫会長、坂口祐二校長、県関西本部の米田裕子本部長等々のご参加を頂き90名余の参加者が集いました。

母校の雨天練習場の整備や文武両道の活躍ぶりが報告され、久々の鳥取弁での会話が弾みました。

今年のサプライズは、大阪を中心に活躍している同窓生の「種まきピアニスト里ほ」さんの弾き語り“ふるさと”などが披露されました。

今年は一度は乗船してみたい 神戸コンチェルト号で開催

本年度は神戸コンチェルト号で、総会&懇親会を開催致します。平成17年度に開催し好評でした。

私たち28回生は、鳥取東高を卒業して、早35年が経ちました。月日が経つのが早かったとも思えるし、永かったとも感じます。

私は、高校を出て、東京の短大に行きましたが、その間に両親が、関西に転勤になりましたから、ほとんど、鳥取には帰る事がありませんでした。ですから今の東高の話題どころか、新しい校舎も知りません。そんな私が、昨年の一本の電話で、微力な私で良ければと当番幹事を引き受けてしまいました。

今まで、幹事会に参加した事もなく、不安で一杯でしたが、昨年の幹事会では28期が3人、その後の会議に5人、11人と手伝ってくれる同輩が増え、役割分担ができて来て、大変心強く感じました。

そして引き受けるからには、何としても、楽しくて、参加して良かったと思える総会にしたいと思います。

至らない所は多々あるかと思いますが、当番幹事を精一杯努めさせていただきます。

(山脈28回・当番幹事 米田美津代)



たかがマラソン されどマラソン

橋本巖(山脈10回) 第3回

走る作家たち

走ることと文章を書くことには、共通点があるよう

に思う。

たまに原稿依頼があるのだが、フリーライターを自称しているくせに書くことは好きではない。だから、四苦八苦することになるのだが、それでも日頃書く訓練をしていると、なんとか締め切りまでに間に合わせ

ことができる。

マラソンも同じだ。大会に参加するとしても、日頃のトレーニングなしにいきなり走るわけにはいかない。走り出しても、ゴールの到着タイムを計算しながら走らなければ、完走はできない。

走ることは脳を活性化し、ひらめきをもたらす。時には、ど忘れしていることも思い出す。

そんなことを考えると、世の作家たちには大いに走ってほしいところだが、散歩はともかくとして、マラソンは彼らには敬遠される行為のようだ。

でも、数は少ないが、走る作家は存在する。今回は、その人たちを紹介したい。

灰谷健次郎

灰谷健次郎(1934~2006)は児童文学作家である。教師を辞めて作家になり、保育園を経営し、淡路島で自給自足の生活そして沖縄・渡嘉敷島へ移住した。彼は、淡路島で49歳の時に走り始め、毎日12km走った。そして、50歳の時、ホノルルで初めてフルマラソンを完走した。

彼は、走ることと縁のない生活をしていた。そして、走っている人を見て「そんなエネルギーがあるのなら、労働に使え、このバカ、とつぶやいていた」(『遅れてきたランナー』)くらいだった。ところが、走ることを知ってから走ることの意味を知った。そして、「目的もないのに走るというバカバカしい行動をとることのできる動物は、人間だけである。人は、大きな幸福を感じたとき、おれは生きているぞ、とつい叫びたくなる。ああいう存在感だ、それを走ることによって得られるのだ」(同)ともいっている。筆者も同様な認識をもったが、走り始めて10年も経つてからだ。灰谷は、わずかの期間にそれをつかんでいる。や

はり作家は違う。

彼をランニングの世界に引き込んだのは、フォークシンガーでトライアスリートの高石ともやと元ランニング学会会長の山西哲郎(鳥取市出身・前群馬大学教授)だった。その二人との鼎談で「走ったからって、世の中変わるわけやない、なにほどのこともないんですけども、その行為の中に学ぶことがいっぱいあるというのは、すごいなあと思うよ」と述懐している。感受性の鋭い「遅れてきたランナー」は、この世をあまりにも速く走り去ってしまった。

丸山健二

筆者の知るところでは、走る作家のうち丸山健二(1943~)が早い時期に走り始めているようだ。彼は、なかなか個性が強くワイルドな作家だ。文壇とは間をおいて安曇野の地から精力的に発信している。彼は、相当な愛犬家で、車、バイク、釣りなどの趣味があり、走ることを日課にしている。

彼の走りは少し変わっている。走る場所は舗装された道ではなく、石と砂ばかりの河川敷が主である。それも持久走でなく、走ったり急に歩いたりと気まぐれである。多分、マラソン大会への参加など眼中にないにちがいない。彼は、走る目的は健康維持だといっている。たしかに、酒は飲まず、ランニングによって鍛え上げた筋肉を備えている。が、それだけではないだろう。

「(走ることで)無駄な皮下脂肪を燃焼させることによって、文章の切れ味を良くしたり、ひらめきの回数を増やしたり、せっかくの発想をノイローゼから守ったりしたいのである」(『安曇野の強い風』)といつていおり、肉体と精神の統一に重きを置いているようだ。

柳美里(ゆうみり)

柳美里(1968~)は33歳の時、わずか2ヶ月のトレーニングでソウルマラソン(フル)を完走した。いくら専門のコーチに教わったとはいえ、そうそうできることではない。尋常ではない走りをせざるを得なかつた背景には、彼女をめぐる血族の過去があった。

柳の祖父は、日本が植民地支配していた朝鮮の陸上競技選手で、長距離種目で数々の朝鮮記録を持ち、戦後の国体に相当する明治神宮競技大会でもトップクラスの実力者だった。もし、日本が1940年の東京オリンピックを辞退していなかつたら、彼女の祖父は日本のマラソン代表になっていたかもしれない。しかし、戦争でオリンピックへの夢を絶たれ、戦後の半島での愛国運動の中で身に危険が迫つたことから、姿を隠して日本へ渡った。

柳は、日本の植民地支配とそれに対する朝鮮民族の抵抗を背景にして、複雑な過去を持つ祖父をめぐる血族・姻族の愛憎を小説にした(『8月の果て』他)

彼女は、「なぜ走るのか」と問われて「走ると気持ちが前向きになるから」と答えている。それも事実の一つだと思うが、祖父や自分に繋がる人たちのことを書けば書くほど走らざるを得なかつたのだと思われる。

村上春樹

日本人でノーベル文学賞に最も近いのが、村上春樹(1949~)だといわれている。筆者は、彼の作品の文学的価値はほとんど分からぬが、走りに関しては生半可な作家ではないことを知っている。

彼は、ほとんど毎日10kmを走り、月間走行距離はおよそ300kmをこなす。フルマラソンはもとより、100kmウルトラマラソン(筆者も走ったサロマ湖100kmウルトラマラソンも完走している)、トライアスロンまでこなす。彼が走る目的は、「小説をしっかり書くために身体能力を整え、向上させる」(『走ることについて語るときに僕の語ること』)ことにある。こう簡潔にいわれたら凡人でも何となく分かるが、そこへ行くまでの文学者の表現は分かりづらい。要約すれば、彼が走ることに求めるところは、小説を書くことによって生じる肉体的、精神的毒素を処理することにある。それは、走ることによって得られる健康な身体と集中力・持続力を養うことで可能になる。走ることは自分の生命線で、小説を書くことについて学ぶ場だというのだ。

こうなるとちょっとついて行けないが、次のように書かれると(同上)、マラソン大好き人間としては限りなく嬉しくなってしまう。

もし僕の墓碑銘なんてものがあるとして、その文句を自分で選ぶことができるのなら、このように刻んでもらいたいと思う。

村上春樹

作家(そしてランナー)

1949~20**

少なくとも最後まで歩かなかつた。(続く)

私のフルマラソン完走の歩み

年齢	回数	年齢	回数
54	1	63	4
55	3	64	1
56	5	65	1
57	1	66	4
58	2	67	3
60	4	68	2
61	4	69	2
62	2	計	39

*59歳は心臓疾患で休養

*今年70歳で40回達成の計画

マラソン大会を立ち上げました

過疎化する一方のふるさとの活性化のお役に立てばということで、筆者が実行委員長となって4月10日、鳥取でマラソン大会を実施しました。

コースは、江戸時代初期の幹線道路・鹿野往来(鳥取城~古海~野坂~吉岡~鹿野~青谷間 28km)の吉岡温泉町~鹿野町間10kmとしました。(大会名は「鹿野往来マラソン」)参加者は、1府5県の240名。100数十名のボランティアの協力もあって、大成功でした。



【写真説明】本大会のポスター(上)、スタート直後(下)



海・港・船

長澤 卓重（柏葉 18回）洋画家

「海上海よ、たえざる繰り返し」とは、フランスの詩人、ポール・バッリーの「海辺の墓地」の一節だ。

打ちよせる波をみるとことの好きな人は多い。その多くは青空に碎け散る白い波をあきもせぬ眺め、もの思いにふけりたがるのはどういうことだろう。

波は、かねてよりたえまなく打ちよせるということから、打ちよせる波の絵は縁起物と言わされてきた。

その打ちよせる波をあきもせぬ眺めていると、一つとして同じ波のないことに気づく。季節によって、そのときの風の強弱によって時々刻々と変化、千変万化するわけだが、場所によっても違いがあるようだ。

日本海と太平洋でも表情が違う。どんよりとした空の日本海のイメージに、からっと晴れた太平洋。どちらの海の波も、その姿をかえながら、くり返し寄せては返す。

そこが、また素晴らしいともきく。そして、海の魅力にとりつかれてしまうことになる。とにかく、見ていて飽きがこないわけだ。荒々しい風景を見たいとき、台風一過の海へ出かけてみる。轟音をたてながら打ちよせてくる波は、迫力満点だ。一度そういう波に出会ったら、その景色は瞼にやきついて、一生忘れることはないとだろう。

私の故郷はその気になれば、30分も歩けば日本海の見ら



れる距離にあった。海の好きだった私は子供のころよくその海を見に出かけた。だから、今も、やや歳はとったものの時間さえあれば、出かけたいと思っているのだ。

父なる山、母なる海という言葉がある。それはどっしりと落ち着いた父親に、包容力のあう母親か。私はその母なる海になぜか、ひどく魅かれる。それも哀愁を帯びた海だ。

海は、さまざまな表情を持つが、一つとして同じ表情はない。春夏秋冬、その表情を変える。それは喜怒哀楽の調べにも似て、四季折々に見せるその表情は、いつみても、いつまで見ても飽きないのである。

潮風を頭にうけながら、腹にひびくような海鳴りを聞きながら、浜辺にたたずむのもいいものだ。寄せては返す波を、ぼんやりと眺めるのもまたいいだろう。

春の陽ざしのおだやかな風の日もまたよいもの。そして、また、満天の星を見ながら、さざ波の音を聴くのもまたよいものではあるまい。

静かな優しい海がある一方で、ある日、突然、その海は怒涛逆まく海に変貌する。それはもうおそろしいほどだ。そかし、その変化のすばらしさに多少の差はあっても、それに誰もが魅せられ、その海を愛しそのための海へ出かけていくのかも分からぬ。

かつて、新聞記者になる前、私は若い時期、船が職場だったことがある。そこで生活の糧を得ていた。それだけに今も海への思い入れは人一倍強い。海にひどく愛着を持ち、船や港に愛着を持つ。

そして、どこの港にせよ、そこに行くと、なぜか心が和む。その海と向かい合い、これからも迷いながら、海や港や船を描き続け、なんとか少しでも納得のいく絵に近づけたいと思っている。

【左は浦富海岸、上は能登三国港川口】

昨年末、興味があつてえびす丸のことを調べました。昔の仲間が10日戎の前に使おうと紙面化し1月8日に下記の記事になりました。この記事を西宮えびす神社の元宮司に喜んでもらい、西宮文化協会の会報に「神の名をつけた漁船恵比須丸誕生の由来」としてとり上げられました。神の名にあやかつた漁船は、戦後、昭和23年ごろまでは、現在の倍はいたのではないかでしょうか。その差を機会があつたら調べてみたいものと思っております。(長澤)

2011年(平成23年)1月8日(土曜日)

言葉

言葉

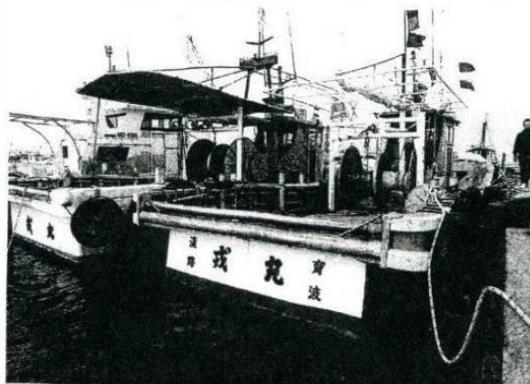
乗合

月刊

(第3種郵便物認可)

港に並ぶ戎丸という
名前の漁船(兵庫県
淡路市の育波漁港
で)=折田直也撮影

えべっさん 海の神様の本領



2827隻 全国7割集中

長澤さんは、モチーフを
求めて海辺を回る中でえび
す丸という船が多いことに
気づき、一昨年から1年か
け、海のある39都道府県で、
漁船名を調べた。
長澤さんの集計では「え
洋画家が調査

間もなく十日えびすの祭りでにぎわう全国のえびす神社。その
えびすの名を頂く漁船が、瀬戸内海沿岸地区に多数分布してい
ることが元船員の洋画家、長澤卓重さん(83)(堺市北区)の調査で
わかった。今でこそ「商売繁盛」を頼まれるえべっさんも、本来は
海の神様。えびす宮總本社の西宮神社(兵庫県西宮市)の田辺竹雄
権利宣も「信仰が瀬戸内海で定着していいた表れですね」と、古来え
びす信仰を支えてきた漁業者たちに思いをはせた。

「えびす丸」漁船

「えびす丸」は4143隻で、
「戎」「蛭子」「恵比須」
「胡子」など、表記は17種
類あつた。このうち、大阪
から九州にかけての瀬戸内
海沿い11府県に2827隻
が集中していた。

西宮神社には、十日えび
すを控えた8日、大漁祈願
の大マグロが奉納される。
同神社によると、えびす神
社は全国で3670社。近
畿より西に多く、「えびす
丸」の地域と重なるという。
川村邦光・大阪大教授
(民俗学)は「瀬戸内が海
の道になつて、えびす信仰
が広がつていつたことが分
かる。漁の安全というだけ
でなく、海産物は神様から
の授かり物という意識か
ら、船に神様の名前を付け
たのだろう」という。

長澤さんは、「漁師たち
が船の名に込めた思いがわ
かる。今年も安全で、大漁
を」と祈つた。

筆者紹介

日本美術家連盟会員 元日本現代美術協会理事 堺市美術協会会員

昨年4月、神戸海洋博物館に油絵100号4点が永久収蔵され、それを記念して「海の風景20点」の2ヶ月間の記念展示。「海の日」には国土交通省より表彰をうけた。母校鳥取東高校の同窓会館にも油絵100F(ベニス)を寄贈している。

中でも愛媛県は632
隻、兵庫県は606隻、徳島
県は451隻もあり、今治
市)も、所属する約200隻
のうち2割が「戎丸」。
漁港の近くにえびす様のほ
こらがあり、船を新造した
時は、ほこらの前で船を3
度回転させて、安全と大漁
を祈願する。自身も戎丸を
所有する小溝政二組合長
(56)は「父親の代から船名
は同じ。運が宿っている」
という。

西宮神社には、十日えび
すを控えた8日、大漁祈願
の大マグロが奉納される。
同神社によると、えびす神
社は全国で3670社。近
畿より西に多く、「えびす
丸」の地域と重なるとい
う。川村邦光・大阪大教授
(民俗学)は「瀬戸内が海
の道になつて、えびす信仰
が広がつていつたことが分
かる。漁の安全というだけ
でなく、海産物は神様から
の授かり物という意識か
ら、船に神様の名前を付け
たのだろう」という。

長澤さんは、「漁師たち
が船の名に込めた思いがわ
かる。今年も安全で、大漁
を」と祈つた。

返信葉書(平成22年度)の 近況報告葉書から

同窓生OB諸兄姉消息をお知らせします。
本紙も14号になりました。皆さんの“元気”を返信葉書の近況欄でお寄せ下さい。

柏葉★8月に木津川市長から、公益財団法人公園都市緑化協会理事と廃棄物減量等推進審議会委員を委託され、高齢に負けないで日々多用なうちに元気に過ごしております。(22/藤田忠雄)

山脈★最近読みたい本が「素粒子論」「進化論」「寿命論」「確率論」「資本論」「国家論」などに偏るのはわかがえりでしょうか、それとも老化でしょうか。(2/金谷充清)★年金需給のその日ぐらしながら喜寿を超えてますます元気にやっています。山3同期会の万年幹事を33年間続けています。(3/多賀輝美)★昨年投稿して以来1年、抗癌剤による治療はつづいております。副作用で辛い時期もありますが、今では慌てず騒がず賢く病気と付き合っている今日この頃です。(3/岡田坦久)★11月は教室行事が山積しており、残念です。画業が集中し来年6月鳥取大丸での個展の計画もあり没頭しています。(4/中村美登)★今年の夫婦旅、この春は長野の杏、甲府盆地の桃の花を愛で、東北の湯沢、横手、角館と山菜を追って旅をしました。この秋は白神山地に分け入りブナ林黄葉を満喫する予定です。(5/松下泰治)★梨を買いに行ったついでにこの年になって初めて「雨滝」に行きました。日本百選の滝と書いてありました。とてもすばらしかったです。鳥取はやっぱり大好きです。(6/宇野良子)★母校開校して90年目前、京阪神60年目の誕生、真にめでたきかな、更に今年は6期生全国大会を関西で開催、オールド、オールドの年齢に突入したとはいえ、歴史ある東校の校歌を肩を組み合つ

て甲子園での前哨戦も兼ねて誇りを持って絶唱し一夜を盛り上げます。(6/久永浩)★診療所の方閉院し、今、旅行を楽しんでいます。先日は飛鳥IIで世界一周をしました。足が動く間旅を楽しむつもりです。(8/大嶋正二郎)

★3年がかりで四国八十八箇所巡りが満願となりました。春、ラスベガスに5泊しましたが治安がよくとても楽しい日々でした(8/下村美津江)★外国、国内の4回の旅が元気の源泉です。今年もプロゴルフトーナメントのスコアラーとして選手と一緒に歩いてスコア送信、8試合の運営にボランティア参加する(10/西尾康弘)★まず上林さん、長い間会長ご苦労様でした。同期の同窓会も終わりましたが関西では時々顔を合わせる機会をお願いします。私も6月で仕事を退職しました。お金と時間を有意義に日々大切に生活したいと思っています。70歳、まだ若いよ!!ネ。

(10/西脇紀恵)★小生2ヶ月前よりグランドゴルフを始めました。初ラウンド2ホールインワンをやりましたが、その後、暑いので休んでいます。(11/片山義孝)★現在、大学史の執筆及び校正作業中です。当日は全国歴史保存機関連絡協議会全国大会のため、残念ながら出席出来ません。(12/橋本弘之)★今、私は船坂里山芸術祭ビエンナーレ2010で推進委員として頑張っております。(12/池田峯代)★現役で頑張っています。4月、鳥取自動車道を利用しました。一車線で少し疲れますが無料だから納得しました。

(17/浜野純郎)★3月にアリゾナに滞在し、アメリカの広大さを肌で感じて自然の生活を一層求める気持ちは強くなりましたが、日本での生活に戻り、まだ何も見出せずにいます。(19/殿井明子)★公民館に来られる高齢者の方々と接していく皆さん向学心が旺盛で健康にも留意しておられ、あれもこれもやっておられること。60代の私はまだまだひよこ、鹿野町に住む母の生き方を見習いながら、いい年を重ねて生きたい、と思う日々です。(19/横川ひとみ)★6月に京都薬科大学を退職しました。今は第2の生活を考慮中です。ウォーキングや山歩きが好きなので仲間に入れて下さる方がいらっしゃいましたら、宜しくお願ひします。それとも、京都を案内しますので皆で会を



谷口 伸(オペラ歌手)を応援していただいた皆様へ心より御礼申し上げます

本紙13号で谷口 伸氏(山脈38回)の「オペラ歌手、やってます」という寄稿と大阪交響楽団の公演をお知らせしました。総会当日には、多くの前売り券も購入して頂きました。関西在住の同窓生も参加しました。

父親の谷口 肇氏(山脈8回)から長文の感謝のメールを頂きました。要約し紹介します。(おかだ・編集係)

2月16日(水)大阪地方快晴。伸が歌の道を志して苦節20年、親子ともども不案内な道を経巡り、漸くたどり着いた日本デビューの日でした。

ザ・シンフォニーホールの舞台でオーケストラを背負い、祈りをささげるような姿で唄い始めようとする息子を見て、心臓が鳩尾を叩き、胸苦しさを覚えていました。

そして、「さすらう若人の歌」の最後の音が消えるまで、息をつめるようにして聴き入っておりましたが、万雷の拍手とブラヴォーの声に、何度も舞台に呼び上げられ、嬉しそうに挨拶を繰り返す息子を見て、久しぶりに「幸せな親」をさせていただきました。

公演後、慶應ワグネルの同期の方々と、親族で、谷口伸を囲む会を催しましたが、そこに、指揮者の寺岡 清隆氏がおいでになり、こんな話をしてくださいました。

「私たちの交響楽団の演奏の副責任者だったクラリネット奏者が居られるのですが、視力を失われて、今は現役を退いておられます。ただその方は、いまでも必ず演奏会においでになって、的確な批評をしていただいています。今日もゲネプロ(公演直前、本番とおなじに、通じでおこなうリハーサル)を聴いていただいた後、いかがでしたかとお尋ねをしました。その方は、『今日の歌い手は、外国人だろう。』といわれました。

いいえ、日本人ですよと言いますと『いや、日本人は、大きな声を張り上げたほうがいい』という流れが主流で、こんなに音を響かせてホール全体をならすような演奏は外国人しかできないはずだ』といわれました。このお話しが示すように、今日の彼の演奏は本当に素晴らしいと思います。おめでとうございました。」

また、当日、NHK・FMの収録が行われましたが、NHK大阪放送局の音楽担当でディレクターの西川彰一氏も参加してくれましたが、彼も「あのピアニッシモでホールの隅々まで響かせることが出来るのは、素晴らしいです。日本オンコンの頃から聴いていますが、格段の成長をしておられるように思います。」といってくれました。

辛口の批評をすることで、私たちから恐れられている慶應ワグネル時代の同期の帝王杉原佐登司氏からも「今日の演奏は、素晴らしいと思います。同期から、このように世界に羽ばたく仲間が出てきたことは嬉しいことです。」と締めくくってくれました。

【左・本年度は2012年2月15日に国内で公演です】

軽妙洒脱な「感激ノート」

上口敦弘氏(山脈14回)が『あっかるいオッサンの「感激ノート』』を近代文芸社から出版されました。民間企業と女子大の40年間の人との出会いの中で感激したことをや様々な文化に接して感動したことをノートに書き留めたものです。

とても読みやすく、短い文章の中に考えさせられるミニ随筆集です。

(ISBN978-4-7733-7516-9C0095 定価本体1000円)



第163回定期演奏会 2012年02月15日(水)



【ブームス探訪Ⅱ】2010~2012年度 全3回シリーズ
 指揮: 寺岡 清高(常任指揮者)
 パリトン: 谷口 伸 ★
 ブームス(ブームス編): ハンガリー舞曲 第3番 へ長調
 シューベルト(ブームス編): 歌曲「御者クローノスに」D369 ★
 シューベルト(ブームス編): 歌曲「メムノン」D541 ★
 ブームス(ブームス編): ハンガリー舞曲 第10番 へ長調
 ブームス(ラインスドルフ編): 4つの厳粛な歌 作品121 ★
 ブームス(シェーンベルク編): ピアノ四重奏曲第1番ト短調作品25

会費（寄付）ご協力のお願い

本年度も京阪神東雲会運営費として会員の皆様に年次会費（寄付）一口1,000円の出捐をお願いしております。総会に参加される方からは、当日参加費用に含めて会費を頂きます。

この会費が通信費など当会の運営費を支えています。昨今の物価の高騰でデータ管理会社への出費が高騰し過去の準備金も底をつきましたが、データ管理や印刷業者の変更、発送作業を理事会で行うなどの経費削減に伴い財政的には収支バランスがやっと昨年は取れて再建のめどが立ちました。

過去の総会参加者と寄付金をまとめると下記のグラフになっています。（左が寄付金、右が参加人数）



総会参加者や、会費（寄付金）収入が減少傾向にあります。昨年度の繰越金は8万円弱でした。規約による「本部の名簿更新時に関西の該当会員全員へ総会の案内を出す」めどがたちほつとしています。

総会では同期ごとにテーブルを用意しています。同期会を兼ね総会へぜひとも数多くご参加ください。皆様の会費寄付金と総会への参加で、当会の活性化と財政的な基盤が確保されます。

（会長 岡田俊一・会計幹事 横山毅）

郵便振込「口座番号 00940-2-133540

加入者名 京阪神東雲会

平成22年度の会計報告

平成22年度会計報告

費目	収入	支出	残高	備考
前年度繰越金	42,843			
総会会費	704,000			
寄付金合計	50,000			
総会会費+2名ゲスト無料		690,650		リーガ支払
会議費(封入作業含む)		42,715		
総会資料作成費		5,600		印刷代他
合計	796,843	738,965	57,878	

当日寄付金76000円とメール送付残金6880円は寄付金合計に入れます。

寄付金会計

費目	収入	支出	残高	備考
前年度繰越金	81,544			
H22度寄付金収入	214,000			185件
東雲会総会当日入金	76,000			76件
振込用紙印字		800		
H22年度総会案内送付		53,120		
出欠葉書671×@50		33,550		
データ管理費(金井氏)		100,000		
振込料		300		
総会案内会報印刷代		41,395		
運賃送付代		5,075		
H22年度用総会費用補填		50,000		
会報編集通信費		1,000		
本部総会出席補助				H22年鳥取会員代理
合計	371,544	285,240	86,304	

双方向の交流を 編集後記

Google および yahoo で『京阪神東雲の窓』を検索すると当会ホームページがヒットします。

過去の総会の画像や故郷の情報が見られます。左下が表紙です。母校の同期会や部活のOB会でホームページを開設されている場合、お申し出があればリンクを貼らせて頂きます。本紙への寄稿も大歓迎です。

年に一度の総会へ出席された方々のみならず、この広報紙とホームページでの交流も大切にしていきたいと思っております。

本広報紙に総会の出欠葉書の下欄に近況欄がございます。その中に降ろしければ「私の中の鳥取」というテーマで一言感想をお書きください。「近況報告の葉書」で特集を組んでみたいと思います。またホームページにある交流ボードで日頃の思いや生活を書き込んでください。

岡田俊一（ホームページ&広報担当）

E-mail: toshi-o@momo.so-net.ne.jp

京阪神東雲会 Homepage

<http://okada.sub.jp/higashi/>

本紙への要望や広報紙の寄稿者の推薦をお待ちしています。カットは山崎勝彦氏(山脈12回)。

京阪神東雲の窓

鳥取県立鳥取東高等学校京阪神東雲会企画会員会
監修者:京阪神東雲会会報施行係

更新記録	お知らせ	交流ボード	故郷再発見
古代東高史	表紙の記録	同窓会画像	リンク
三中校歌	東高校歌	応援歌	感想メール

H22年度総会の画像を「同窓会画像」の部屋にアップしました。
夜の魚見台 11/07/17

昨日(11/07/17)、なでしこジャパンを見たくて夜に鳥取から大阪に戻ってきました。途中で魚見台から「いか漁の漁火」と浜村付近の街のあかりが月の光に照らされており撮っていました。高速料金の土日1000円上限停止で車の量はガタ滅びです。【まだ・豊中】
【2011/07/17 撮影】